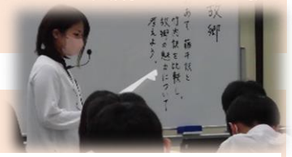
新しい 授業 づくりの文化を創る

令和4年「能力ベイスの授業づくり実践講座」

第９号

能力ベイス授業づくり実践講座は、教材研究会と授業研究会をセットにして実施します。この講座がスタートし、今回の授業は4つ目のユニット、合計8回目の実践講座でした。今回もたくさん先生方にご参加いただき、回を重ねるごとに、授業や授業後のグループ協議も有意義な焦点化された協議時間となっています。セット受講ならではの授業者の変容等、様々な視点を持って、協議し、齊藤先生から学んだ様子を紹介します。



提案授業　第3学年　国語科『故郷』授業者　増山　明日香　教諭（吹田市立西山田中学校）

義務教育9年間修了時に、子供が身につける力とは？

この1年間、先生方と共に過ごした子供一人ひとりは、どのような経験をして、どのような成長がありましたか？過ごしてきた日々を振り返り、次年度の準備を整えている先生も多いのではないでしょうか。

さて、今回紹介する授業は、中学校3年生の実践です。小学校1年生から積み上げてきた義務教育9年間の最後の1年となります。受講者にとって、義務教育修了時の姿に向けて、自分の受け持つ子供たちが、どのような力を積み上げていけばいいのか問い返す研修となりました。この新聞を、皆さんにとって、次年度への準備の視点の1つにしていただければと思います。

提案授業 と「持続可能な社会の創り手の育成に貢献する ESD」との関わり

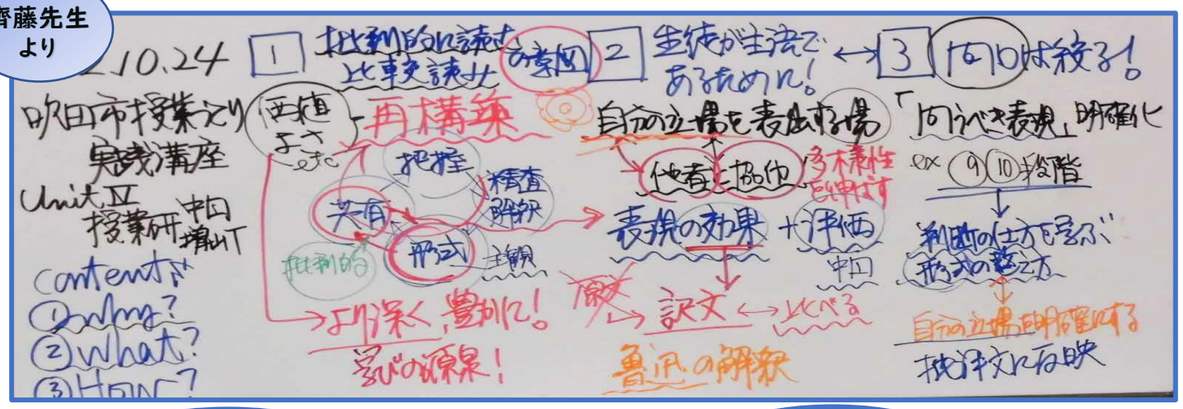
授業者の増山先生は、教材研究会の学びから、本単元で身につける汎用的な力を、「文章を**批判的に読み**、自分の考えを広げる力」と位置付けました。そこで、『故郷』の魅力を伝える批評文を書くことをゴールとして、訳者の異なる2つの訳文を比較読みする授業に取組みました。ここで大切にされた「批判的に考える力」は、学習指導要領の基盤となる理念です。ESD（持続可能な開発のための教育）の7つの能力・態度の1つ目にもあげられており、持続可能な社会を創っていく上で、子供たちが身につけなければならない力です。今回は国語科を通しての挑戦です。

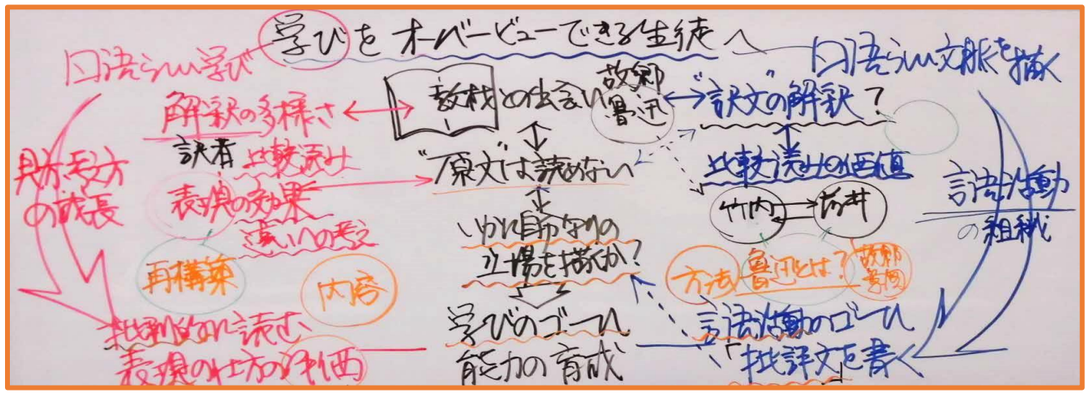
ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度

1. 批判的に考える力
2. 未来像を予測して計画を立てる力
3. 多面的・総合的に考える力
4. コミュニケーションを行う力
5. 他者と協力する力
6. つながりを尊重する態度
7. 進んで参加する態度

出典：「持続可能な開発のための教育」（文部科学省ホームページ）

齊藤先生より





WHY の視点

1 「比較読みを通して、批判的に読む」の意図

大切なことは、「なぜ、私たちは比較読みをしているのか？」という比較読みの意図を、子供たちが自覚しているかどうか。つまり、子供たちにとって言語活動のゴールが明確であるかどうか。明確であれば、子供たちは問いを持ち、動き始めることができる。

今回の授業では、「『故郷』の批評文を書くことで、自分の考えを再構築すること」がゴールである。そのゴールを達成する方法の１つとして、比較読みをしている。

比較読みを通して解釈を深め、豊かにしていく営み（再構築していくプロセス）そのものを授業者は大切に扱い、明示的に指導する。その指導を繰り返すことで、子供たちはより批判的に読むことができるようになった自分の成長を実感できるのである。そして、その成長実感がさらなる言語活動の学びの源泉となるであろう。

WHAT の視点　HOW の視点

2 生徒が主語であるために! ⇔ 3 話題の間口は絞る！

授業において、「協働」とよく言われているが、私たちは何を大切にしなければならないのだろうか。ただ意見を共有するだけではなく、自分の立場を明確にして、議論したり他者の考えを聞いたりする中で、自分の多様性を広げることを大切にしたい。

そのような営みを授業で行うためには、話題の間口を絞り、議論すべき焦点を明確にするとよい。そうすると、同じ問いについて異なる立場から主張しあう。今日、近くにいた子供に、「議論の１番の焦点はどこなの？」と尋ねると、形式段落の9と10と答えた。例えば授業では、9と10段落に絞って扱えば、子供はその表現の効果について徹底的に解釈しあうことができる。それ以外の段落については、自分の批評文の中に、使うことができれば、それで十分。大事なことは、その焦点化された議論を通して、自分の批評文の中で、どう魯迅のことを表現するかということ。

学びをオーバービュー（俯瞰）できる生徒へ

「国語らしい学び」と「国語らしい文脈」の２軸から能力を育てる

学びをオーバービューするとは、「今日の授業は何のための時間なのか？」と、ゴールを見通して今の学びについて俯瞰するということ。「批評文を書く」というゴールを意識しながら単元を通して学ぶことより、批判的に考える能力は育成される。そのためには、教師が「国語らしい学び」と「国語らしい文脈」の2軸で単元を描くことが必要である。それを小学校から丁寧に積み上げれば、子供たちが、「この先のゴールは何か」ということを意識しながら、言語活動に取組むことができるようになる。

『故郷』は原文を読むことができないため、訳文で『故郷』を解釈しなければならない。その時に大切なことは、「本当にこの解釈でいいのか？」と批判的に読むこと。今回の場合、「１人の訳者で魯迅を語れるのか？」という「問い」から、子供たちは「それならいくつかの訳文を比較した方がいいのではないか」と比較読みの価値を実感することができる。このような文脈を丁寧に描くことで、子供たちは比較読みをすることに切実性、必然性を見出す。そして、学びのゴールに向かうプロセスを経て、『故郷』の解釈をより確かなものにしていくことで、子供たちは成長を実感することができる。

受講者より

- **教材研究会から論点であった内容が今回の研修で整理されたように思います。 回を重ねるごとに学びがアップデートされてきました。（K 先生）**
- **学びを“オーバービューできる生徒” 自分が何のために何を学んでいるか俯瞰できるようにするために、小学校から明示的指導をして行く必要があると感じました。 再構築をするから読みたくなることを意識して授業をしたくなりました。（S 先生）**

【編集後記】Society5.0を生き抜く子供たちに、教科横断的に子供たちの資質・能力を育成することは喫緊の課題です。能力ベイスの授業づくり実践講座において、校種、教科を越えて子供たちのために論議を交わす先生たちの姿は、いつも輝いています。様々な先生との出会いにより、吹田市の教師の輪が広がっています。学びをオーバービューできる生徒にするため、私たちも授業をオーバービューできる教師になる必要があります。これからも、学び続けていきましょう。新しい先生のご参加をお待ちしております。　（文責：教育センター　飯田）